世間解　第四二四号
令和五（二〇二三）年 六月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―聖徳太子に聞く（その二）―

六月であります。どうも何かにごまかされているような気がして、落ちつかない日が続きますが、皆さまには決して嘘偽りのないご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

先月は親鸞聖人が“和国の教主”と仰がれた聖徳太子の「十七条憲法」お言葉の一端をお聞かせいただきました。

親鸞聖人が恩師・法然聖人のお弟子になられる決断が出来たのは聖徳太子の夢の告であったといわれたいます。

親鸞聖人の妻、恵信尼さまが季娘の覚信尼さまに出されたお手紙である『恵信尼文書』にはその時のご様子を、

山を出でて、六角堂に百日篭らせたまひて後世をいのらせたまひけるに、九十五日のあか月、聖徳太子の文を結びて、示現にあづからせたまひて候ひければ、やがてそのあか月出でさせたまひて、後世のたすからんずる縁にあひまゐらせんとたづねまゐらせて、法然上人にあひまゐらせて、また六角堂に百日篭らせたまひて候ひけるやうに、また百か日、降るにも照るにも、いかなるたいふにもまゐりてありしに、ただ後世のことは、よき人にもあしきにも、おなじやうに生死出づべき道をば、ただ一すぢに仰せられ候ひしを、うけたまはりさだめて候ひしかば、「上人のわたらせたまはんところには、人はいかにも申せ、たとひ悪道にわたらせたまふべしと申すとも、世々生々にも迷ひければこそありけめとまで思ひまゐらする身なれば」と、やうやうに人の申し候ひしときも仰せ候ひしなり。

このようにお伝えくださってています。

比叡山で二十年間学問と修行に明け暮れていらっしゃった親鸞聖人は、間違いなく後世のたすかる道を確認するために、今後自分はどうすればよいかと京都の六角堂に百日間こもられたというのであります。六角堂のご本尊は救世観音さまで聖徳太子はそのご本地（生まれかわり）であると信仰されていました。

比叡山で学問と修行を極められた親鸞聖人は今後の自分の進む道を聖徳太子に確認しようとされたのであります。

すでに親鸞聖人は京都で法然聖人という方が“阿弥陀仏の本願を信じて念仏するものは、出家であれ在家であれ、持戒の者も破戒の者も分け隔てなく救われるという万人の救いの道を説いておられる”ということはご存知であったはずです。

しかし、当時の比叡山では〈法然の説く教えは仏教ではない〉と厳しく批判する学僧が多く、親鸞聖人のお得度の師匠である慈円僧正もそのお一人でありました。本来、廃悪修善（悪をやめて善を修してゆくこと）を要とする仏教にあって、出家も在家も、善人も悪人も、賢者も愚者も阿弥陀仏の本願を信じて南無阿弥陀仏と念仏すれば平等に阿弥陀仏の浄土に救われると説く法然の教えは仏法を堕落させる邪説であると強く非難されていたのであります。

自分を仏道に導いてくださった師匠の慈円僧正をはじめ周りの仲間たちは〈法然の教えは邪説である〉と声をそろえる。しかし、うわさに聞こえてくる法然聖人の説かれる善悪賢愚の隔てのない阿弥陀仏の本願の救いには心ひかれるものがある…。法然聖人のお教えが邪説なのか、それともまことの救いの道を説く善知識なのか…。法然聖人の教えに心ひかれるが直ちに法然聖人を訪ねることも出来ない。『恵信尼文書』に「後世のたすからんずる縁」と記されているように親鸞聖人は比叡山の学問と修行では生死を超えてさとりの境地に至る自信が持てなくなっておられたのでしょう。

そんな中で迷いぬいた果てに、和国の教主と信奉されていた聖徳太子のご指示を仰ごうとされたのが当時の親鸞聖人だったのです。

比叡山の学問と修行では生死を超えてさとりの境地に至ることは出来ないかもしれない。そんな中で、万人の救済を説く法然という方の教えがある。万人がすくわれる道はそのまま自分自身がすくわれる道である。

親鸞聖人は六角堂参籠に踏み出してくださったのであります。

合掌